

正宗白鳥

正岡子規について

正岡子規について

かつて島田青峰氏の抄録した「正岡子規随筆集」によつて、子規の病牀録の一部を読んで感動したことがあつたが、今度改造社本によつて、その全部を読んだ。「松羅玉液」「墨汁一滴」「病牀六尺」「仰臥漫録」の殆どすべてが、病める才人の実感実録であるので、時代を経て読んでも、一言一句読者の胸に響く力をもっていて、決して陳腐な感じがしない。こういう重病に苦んでいる者は無数である。しかし、多くの人は、自己の病中の記録

を書残し得ないのだし、また書残しても子規のような文学上の事業をしなかつた常人の記録は人に読まれないのだ。それで、私は子規の随筆を通して、無数の無名の病人の苦悩を推察する。子規はまだしも、同情ある多くの友人に圍繞されて慰められていたのだから、苦悩がいくらか柔げられていた訳だ。苦痛を文字に現わしていられただけでも、気が紛れていた訳だ。「仰臥漫録」は生前には世に発表されなかつたものだそうだが、今読むと、この一篇に最も心が惹かれる。新聞に寄稿するものには、まだいくらかの気取りがある。遠慮がある。この一篇で

は、病人の心境がそのままに窺われてそくそく惻々として読者の心を動かすのである。私は、毎日の食事の分量にも興味を感じた。食事だけが楽しみで、それに惑溺しようとした気持が、日々の食物の種類と分類と分量をこまかに書いたところにおのずから察せられる。「もう一度本膳で御馳走を食って見たい」と云っているに空想する所など、評判の俳句論よりも私には面白い。ある日俄に精神が変になって、「サアタマランサアタマラン」「ドウシヨウドウシヨウ」と苦しがる時、看護している母親が、「シカタガナイ」と静かに云う。「ドウシテもタマラ

ン」ので友人を電報で呼び寄せることにして、母親を便に出して、独りになってから、ふと自殺を企て、小刀を手に取りとうとして迷っているうち、しゃくり上げて泣き出した。やや落着いてから、「逆上するから目が開けられぬ。目が開けられぬから、新聞が読めぬ。新聞が読めぬから只考える。只考えるから死の近きを知る。死の近きを知るから、それまでに楽しみをして見たくなる。楽しみをして見たくなるから突飛な御馳走を食って見たくなる。突飛な御馳走を食って見たくなるから雑用が欲しくなる」と連想を恣にするところなど、このあたりの日記

は、子規全集中の圧巻であつて、「花枕」や「曼珠沙華」のような詰らない小説とは比較にならない、それで、中江兆民の一年有半のような浅薄なことを書並べたものが死に瀕したる人の著なればとて新聞にて褒めちぎられ、忽ち際物きわものとして流行して六版、七版にも及んだことを憤慨しているのが、かの「突飛な御馳走が食いたい為雑用が欲しくなる」と金を欲しがった気持と連関させると、兆民に対する子規の心に、羨望嫉妬があつたかも知れないと、私は想像している。

和歌俳句に関する子規の所論は定評の如く卓見に富ん

でいるが、その他の文学論には、あの時代相当の愚論も少くない。近松や西鶴についての感想はことにそうである。ところが、先頃の文芸欄に掲げられた小山内氏の「病間雑記」中の子規に関する記事を読むと、氏は子規の近松観は肯綮こうけいに当っているとし、痛快だと云っている。私には腑に落ちない。近松の作品がそのままでは今日の舞台に上らないのをもって、演劇として幼稚である証拠として、後人の改作の方が舞台に上ったために推賞に価しているると子規は見ているが、小山内氏は、果して「天の綱島」でも、「冥途の飛脚」でも改作の方が、戯曲とし

て原作より勝ると思っっているのであるうか。十八世紀には、シエークスピアの改作が上演されていたが、これも改作の方が傑れていたのであらうか。

子規は和歌に於て、古今を貶して萬葉を激賞している。ところで小倉の「百人一首」などを見ると、持統天皇「春すぎて」にしても、安倍の仲磨の「三笠の山」の月にしても山部の赤人の「田子の浦」の富士にしても古代の和歌が改作されている。改作が後人の好みに適したらしく、原作よりもその方が今日まで「一般に流布した」ことを証拠として、改作和歌の方が原作よりも傑れているとは

云わなかつたに違いない。和歌に於ては、あれほどの卓見を見せながら、「一年有半」の通俗的浅薄を罵りながら戯曲に於ては、通俗を標準にして論を立てるのは、その愚嗤^{わら}うべきものである。小山内氏は、「恐らく旧劇の当事者の殆どすべてが首肯する議論である」と云つて、今日の旧劇の当事者を証人に引出して大近松を批判せる量見も、私には分らない。

「道行」の文章価値については、子規の説が多少当っていないことではない。しかし、あの「道行」は、近松の浄瑠璃のうちでも、語るより唄うところである。三絃に合

わせて唄われるのである。読まれるための文章ではない。長唄とか清元とか常磐津とかの詞句をただ読むと、文章としてはろくなものがない。まだしも近松の「道行」の方が傑まよっている。謡曲だって、子規の論調を用いると、随分拙劣な分子に富んでいると云っていい。

西鶴についても、子規は、「一の文章家たるに止まれり。しかも形式的の文章家たるに止まれり」と云っている。その他、彼れの文学論に愚論が多いのだが一方に傑れたところがあると、その人の他の愚論暴論までも買被られることが多い。

歌人平賀元義は子規によって発見された萬葉の骨法を心得た近世に稀な作家とされている。しかし萬葉時代の歌人は、その当時の日常語をもつて所感を歌ったのであるまいか。何百年何千年前の死語を用いて歌ったのではあるまい、しかるに、平賀元義は、彼の生存していた時代の生きた言葉を用いないで、萬葉の古語を用いた。……その古語を有力に使いこなしたところがあるがなぜその意気で、現代語を現代の生きた感情を托して歌いこなさなかつたのであろう。萬葉の和歌は今日でこそ註釈を要するが。当時は誰にでも分つて、直にそれを聞く人

の胸に伝わったに違いない。平賀元義の和歌は、萬葉語に通じた人でなくては理解されない。生前一般人に認められなかったのは当然である。

日本文学電子図書館

正岡子規について

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館